



津田永忠と沖新田の人柱

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

「一 一」の荒手」から百間川の河川敷をのんびりと自転車で下流へと向かう。河川敷は広く、サッカーグラウンドや公園などに活用されているが、洪水時の放水路だからか川幅はせまい。近代改修直前の百間川は堤防の無い箇所が随所であり、更に稲作が行われていたというから、緊急時以外は川というより土堤に囲まれた田んぼという感じだったのだろう。左岸側に庄内川を合流させるための水門が見え、川幅も広がってきた。あと三キロばかり進むと砂川も合わさる。このような小河川は沖新田の開発に伴い、地域の洪水排水機能を百間川へと集めるために、津田永忠が合流させた。そして、児島湾への排水の中核を担うのが、河口に設けられた大水尾と排水樋門だったのだが、まずは沖田神社へ向かう。

境内に入るとすぐに永忠の銅像があった。拝殿も立派だ。思いのほか参拝者もいる。「どうせまた、さびれた神社なんだろう？ 人柱のやつ」と言ってる倉敷に去った、同行者を見返したい気分だ。とはいえ、人柱となった「おきた姫」は本殿ではなく、その裏の小祠に祀られているのだが。

さて、岡山の新田開発は、宇喜多秀家の頃には始められていたらしいが、池田光政の代になると人口が増えて、田畑が大いに不足する事態となり、まず

まず必要に迫られた。農家の次男三男に耕地を与えなければ藩が立ち行かなくなったのだ。そこで、光政は積極的な新田開発を奨励し、その遺志は息子の綱政に引き継がれ、必然的に実務は永忠が担当することになった。

まずは延宝七（一六七九）年に完成した三〇〇町歩の倉田新田。つづいて貞享元（一六八四）年の辛島新田五六〇町歩。こうした実績を積み上げて、一、五四〇町歩という岡山藩空前規模の沖新田の開発に取りかかった。ちなみに沖新田の範囲を地図で説明すると、岡山城の南五キロほどのところを国道二号線が東西に走っているが、それを旭川の左岸から東へ、百間川を越えて君津ジャンクションまでたどり、その範囲の国道二号線から南側、児島湾までの全ての土地がおおよそ沖新田にあたる。

そして、そうした大土木事業につきものが人柱だ。寛政十（一七九八）年刊行の『続近世畠人伝』によると、沖新田を開発するには人柱を竜宮に献じなければならぬが、罪人は不可で、事故で海に落ちた者も勘定に入らない。そこで、「きた」という女が志願して人柱となり、於幾多明神として祀られたという。研究者の柴田一氏は、『沖新田・沖田神社と沖田姫』にて想像をたくましくし、沖田姫は、すっかり

者の津田家の奥女中であり、彼女が入水した場所は沖田神社から百間川沿いを一キロほど南下した古宮神社の場所などと、色々推理をしている。

古宮神社は、宝永六（一七〇九）年以前の沖田神社の前鎮座地であり、高潮などで浸水するので移転願が出ていたにも関わらず、永忠が存命の頃は頑として場所を動かさなかったのは、そのためだというが事実はいかがだろうか。



沖田神社本殿の裏にある「おきた姫神社」

[交通] 岡山駅前から自転車で約1時間